京都
KYOTO

不思議ふしぎ!?

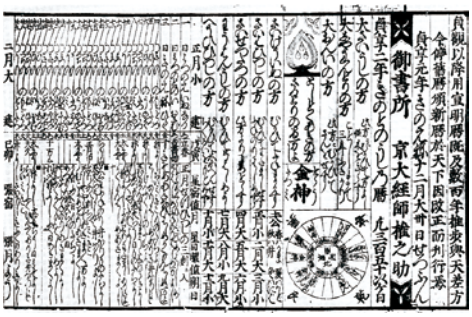
京都に隠れた意外な秘密を紹介します

暦がつなぐ道

「おさん・茂兵衛」供養塔の妙

十月は時代祭の月。つまり平安京が生まれた京都の誕生月です。そしてまたこの月は日本の暦の誕生月でもあります。

貞享元年(一六八四)十月、中国の暦をそのまま輸入し、狂いが明らかな宣明暦に代わり、初めて日本人は日本の風土、気候に合った独自の暦を手に入れました。渋川春海の貞享暦です。本来碁打ちであった彼を天文の道へ進ませたのは、本因坊道策という天才碁士でした。



貞享暦　右側太字に「御書所　京大経師権之助」とある。
大経師家の主人・浜岡権之助のこと。彼の妻がおさん。

このどうにもならない才能を見て己の碁の限界を感じ、それが日本に独自の暦をもたらす原動力となったのです。

さて、貞享暦が生まれた同じ年、暦に関わるある家で事件が起きます。烏丸四条下ルで暦を製作販売した大経師・浜岡家で主人の妻おさんと手代の茂兵衛が密通したのです。二人の不義は発覚し粟田口の刑場で磔、五日間晒されました。このことも加わり浜岡家は暦販売の権利を失い、代わって降屋家が大経師を継ぎます。

この事件は話題となり、三年後、井原西鶴は『好色五人女』の中で「中段に見る暦屋物語」としてこの事件を作品にします。さらに三十三年後、西鶴をもとに近松門左衛門が「大経師昔暦」という人形浄瑠璃を書きあげ大ヒットするのです。そして昭和になり川口松太郎が近松の作品を下敷きに「おさん茂兵衛」という戯曲を書き、これを溝口健二が『近松物語』として映画化し一世を風靡しました。昭和二十九年のことです。この年は黒澤明の「七人の侍」、木下恵介の「二十四の瞳」、本多猪四郎の「ゴジラ」などが次々と生まれた日本映画の一つの頂点でした。道ならぬ悲劇が作家の創造力を刺激して芸術の道が生まれ、その道を煌めく才能が脈々と継いでいるのです。

「おさん・茂兵衛供養塔」　寂光寺
前面左側の小さな石塔　右が本因坊道策の供養塔。

現在、「おさん・茂兵衛」の供養塔とされる小さな石塔が、日本囲碁界の菩提寺ともいうべき仁王門通の寂光寺に静かに安置されています。浜岡の後を継いだ降屋家歴代の墓に守られるように置かれていたものでした。降屋にとっては暦の家職を与えてくれた二人ということでしょうか。しかもいま、この石塔はその昔渋川春海に囲碁の道を断念させた本因坊道策の供養塔と並んでいるのです。運命の妙を感ぜずにはいられません。

(京都・清遊の会　堤勇二)

寂光寺墓地　左端が初代本因坊算砂、及び歴代本因坊の墓。
右下の道の突き当り正面に二人の供養塔がある。

歴史や文化、全てが源流へとたどり着く古都。
京都を知ることは日本を理解すること。

京都好きを大好きに

京都検定
京都・観光文化検定試験
京都商工会議所